

長野県白馬高校は、急激な生徒数の減少を受けて、1990年代から地域ぐるみで学校の特色化・魅力化を進めてきた。豊かな自然や、外国人観光客が多いことで盛んな観光業などの地域資源を生かした特色ある学校設定科目を導入。2016年度には、観光業の人材育成を目的とした国際観光科を新設し、全国から生徒を募集することで、生徒数の維持を図っている。

白馬の自然と観光業を

生かした学校設定科目で、

地域と連携した

実践的な学びを実施

長野県白馬高校

地域の存続をかけた
地域唯一の高校の特色化

山岳リゾートの聖地として世界中から観光客が訪れる長野県白馬村。同村では、以前から人口減少が課題であり、地域唯一の高校である長野県白馬高校は、1989年度に約400人だった全校生徒数が、

2004年度は約200人と、15年間で半減した。同校が廃校になれば村存続の危機につながると捉え、1993年、同村と、村に隣接する小谷村^{おたに}の教育委員会と小・中学校校長、PTAから成る「白馬高校を育てる懇話会」(以下、懇話会)を設置。地域の特色である観光・環境、山岳スポーツ系のコースの導入などで同校の魅力化を図った。

それでも生徒数は年々減少し、2013年度から2年連続で、統廃合の対象となる全校生徒数160人を下回った。懇話会は、同校の再建案を練って、長野県教育委員会に提出。普通科に加え、全国から生徒を募集する国際観光科を新設することで存続が決まった。同校は、両村長が学校運営に参画するコミュニティ・スクールとなり、寮の設置や運営、校外実

習のためのマイクロバスなども両村が負担。進学希望者のための公営塾も村費で設置された。学校存続に動いた人々の思いを、関正浩校長は次のように代弁する。

「魅力的な学校となれば、インターンやUターンが見込め、地域活性化につながる可能性があります。また、郷土愛を持ち、白馬のために働く人材を育むことも、地域の切実な願いです」

20年以上にわたる取り組みの過程では、どのような魅力を打ち出せばよいか、様々な議論があった。「『優秀な中学生が村外の高校に進学しないよう、大学合格実績の向上を目指すべき』といった声があったのも事実です。しかし、それでは他校との差別化は図れません。白馬だからこそ設置できる魅力的な科目で、目的意識の高い生徒を県外からも募集することを、理想として掲げました」(関校長)

地域資源を生かした
多彩な科目を組み込む

同校は、懇話会や地域の意見を

聞きながら、観光・山岳などの地域資源を生かした学校設定科目を設置した。中でも、16年度に新設した国際観光科では、「グローバル観光」「山岳基礎」「環境」など、

多彩な学校設定科目を導入し、地元ホテルと連携して1泊限定で同校生徒が運営する「高校生ホテル」、地元のネイティブ・スピーカーと英語漬けの1日を過ごす「イングリッシュ・デイ」など、実践的な学びを行っている(図1)。



校長
関 正浩
せき・まさひろ
教職歴35年。同校に赴任して2年目。

国際観光科主任
浅井勝巳
あさい・かつみ
教職歴18年。同校に赴任して5年目。商業科。

学校概要

設立 1951(昭和26)年
形態 全日制/普通科・国際観光科/共学
生徒数 1学年約60人
2021年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、鳥取大、長野県立大、静岡文化芸術大に3人が合格。私立大は、桜美林大、國學院大、専修大、中央大、東洋大、松本大、関西大、近畿大、立命館アジア太平洋大などに延べ23人が合格。

学校設定科目は、授業内容や評価方法をシラバスに明記し、チーム・ティーチング(以下、TT)とすることで、担当教師が異動しても、特色ある教育が継続できるようにしている。国際観光科主任の浅井勝巳先生は説明する。

「例えば、『環境』は理科の教師間で、『観光』は地理歴史・公民科と商業科でTTを行っています。赴任歴の長い教師と赴任したばかりの教師を組み合わせることで、指導のノウハウが継承され、授業の連続性を担保できるようにしています。学校設定科目は、学校の特色を持続する上で重要な位置づけになっています」

学校設定科目の取り組みが進み、地域連携の実績が広まると、地域の協力者が増えたり、違った視点での取り組みが提案されたりと、外部との連携はさらに進んでいった。

例えば、世界的なアウトドアスポーツメーカーからSDGs(＊)に関連した消費者教育での連携を提案された際は、浅井先生が担当する商業科の科目には時間の余裕

図1 地域をフィールドにした、同校の特色ある学び

科目名	取り組み内容
野外と教養	白馬地域を中心とする自然の中での体験学習や創造的な活動を通して、問題解決力や行動力の向上を図る。
時事問題	現代社会の具体的な諸問題を新聞記事から取り上げて考察することで、広い視野から社会と人間についての理解を深め、判断力を身につける。
環境 I・II	地域の大自然をフィールドに観察、調査、実験を行い、生物とそれを取り巻く環境について理解を深める。環境Iでは環境調査についての基礎・基本を身につけ、環境IIでは環境保全のための実践的態度や意欲、思考力・判断力の育成を図る。
観光I	地域を知るフィールドワークを行い、地域の現状と課題について認識を深める。地歴・公民科と商業科の教師のチーム・ティーチングで指導する。
観光II	ホテル・レストランでサービスの提供等各種業務に携わり、おもてなしの心(ホスピタリティ)を身につける。
グローバル観光	地域課題の調査や、ボランティア活動への参加を通じて、持続可能な地域とはどのようなものを学び、地域の理想の未来を提言する。
観光コミュニケーション英語	地域の外国人がツアー客として参加。生徒は、一緒に各所を巡りながら英語でガイドを行う。最後に、地元の観光業者からフィードバックを受ける。

※学校資料を基に編集部で作成。

生徒の心に火をつけることが
進路実現の鍵

がなかったため、カリキュラムを作成中だった2年次の「総合的な探究の時間」で実施できないか、担当教師に相談し、6時間のプログラムを実現させた。

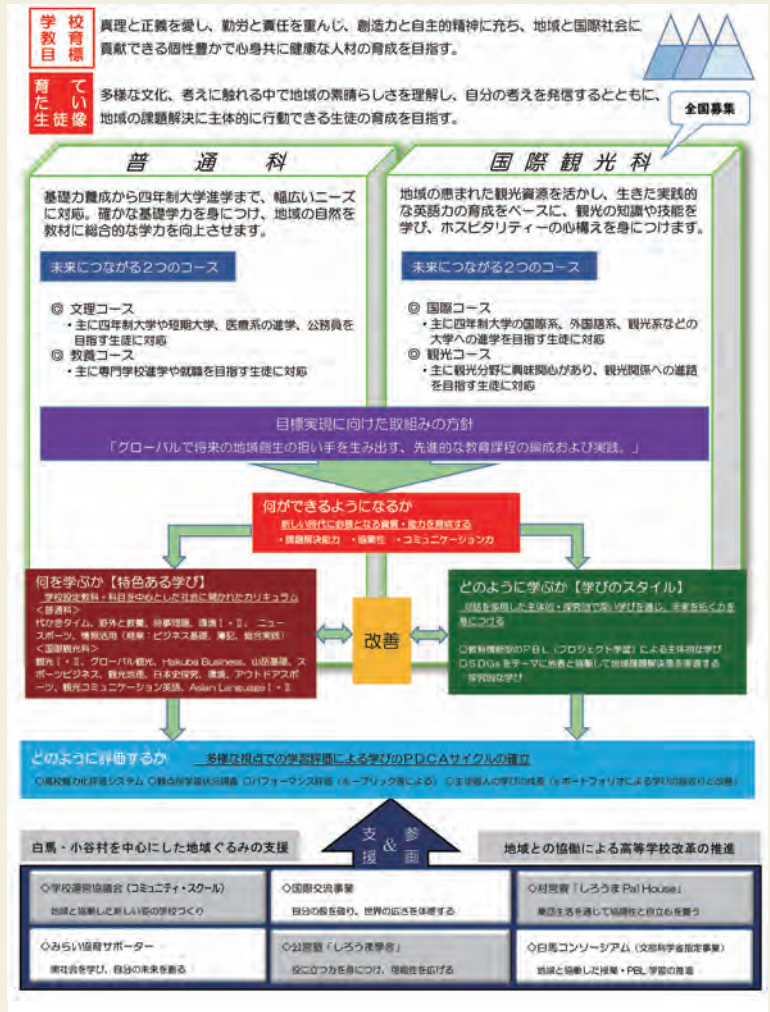
「本校の特色化に関連する外部からの提案は、できる限り受け入れられるようにしています。私も担当教師と一緒に先方の話を聞き、取り組みのねらいや期待される効果を共有して、その取り組みが生徒の成長にどうつながるのかを検討します。連携先と担当教師が、互いに地域の思いを理解して協働できるよう、管理職として環境の整備に努めています」(関校長)

同校は、全国の中学生への広報活動にも積極的だ。学校説明会は、仙台、東京、名古屋、大阪などで実施。観光教育・国際理解教育・環境教育・山岳スポーツの4本柱を前面に出し、「白馬で本物に触れよう」とアピールしている。そうした努力が実り、今や生徒の約4割が、県内他地区及び県外出身者だ。

同校の特色に引かれ、自分のやりたいことができる学校だと、明確な目的意識を持った生徒が入学

＊ Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

図2 グランドデザイン



※学校資料を一部抜粋して掲載。

するようになった。また、入学時には学力的に厳しかったが、同校で夢や将来像を描き、学校推薦型選抜や総合型選抜で希望進路を実現する生徒が増えている。

「自分の目指す生き方や適性が少しでも見えてくれば、学習にも前向きに取り組むようになりま

す。高校生はまだ発達段階であるからこそ、彼らの心にかに火をつけることができるかが、魅力的な学校であり続ける上での鍵だと思えます」(関校長)

また、地域の人々の意識にも、変化が表れてきた。地域住民へのアンケートの結果では、数年前ま

で「高校卒業後は地元に残ってほしい」といった声が多かったが、今では、「一度、外の世界を見て視野を広げ、白馬のために何ができるかを考えてほしい」といった声が増えている。

「地域について知れば知るほど、地域に親しみを感じ、地域のため

に何かしたくなるものです。地域と連携した取り組みを充実させ、たとえ一度は地域を離れたとしても、白馬のことを考え続ける生徒を育てていきます」(関校長)

新課程では入試も見据え、柔軟な科目選択を可能に

特色化を追求したゆえの課題も出てきた。学校設定科目を最大限増やした結果、国語・数学などの5教科の履修科目数が減少。特に、国際観光科は文系科目に特化した教育課程としたため、理系科目が少なく、受験校が制限される懸念があった。そこで、22年度からの新教育課程は、希望進路に幅広く対応できるよう改訂する。具体的には、国際観光科の生徒が普通科の科目を履修できるよう、選択科目を柔軟に設定する予定だ。

「多彩な学校設定科目や探究学習で視野を広げても、大学入試で必要とされる科目を履修してないことで希望の大学が受験できないことになれば、学習意欲が低下しかねません。そのバランスをどう取

るかが、特色化・魅力化の難しいところだ」（浅井先生）

そうした課題はあるものの、特色化は今後も一層推進していく。その1つが、SDGsを軸にした小・中学校との連携だ。地元の小・中学校では、SDGsをテーマにした授業を地域と連携して実施しており、高校生が小・中学校を訪れ、SDGsについて教えるという交流が始まっている。

「今後は、小・中・高でSDGsについて学ぶ内容を整理・共有し、学びの連続性を持たせたいと考えています。白馬高校に進学すると、環境に配慮した商品開発ができる、断熱材を使った省エネについて研究できるなど、小・中学校での学びを本校ではどのように発展させることができるのかを、小・中学生の段階から伝えていくことで、本校への進学希望者を増やしていきたいと思っています」（関校長）

取り組みを整理して、 ブランドデザインを策定

20年度に長野県の公立高校で実

施された「3つの方針」と「ブランドデザイン」の策定は、特色化に注力してきた同校が、改めて自校の目指す方向性や育てたい生徒像を振り返る機会になった。同校は、以前から生徒募集で伝えてきた内容を「生徒募集方針」に、学びの内容を「教育課程編成・実施方針」に整理していった。

「ブランドデザイン（図2）の策定は、本校が積み上げてきた取り組みを改めて整理し、校内で共有する機会になりました。本校の特色や魅力を対外的にアピールしやすくなり、連携先に本校の教育方針を知っていただくことも容易になりました。地域の方とよりよい教育活動を展開していくための対話のツールになればと考えています」（浅井先生）

さらに、学校設定科目を始めとする特色ある学びが、生徒の学習意欲や生徒育成方針に掲げる「課題解決能力、協働性、コミュニケーション力」にどの程度結びついていくかを生徒による自己評価などによって明らかにし、教育活動の改善につなげている。

長野県教育委員会に聞く

「3つの方針」の 策定は、どのように 進められたのか

3つの方針は、各校が元々掲げている教育目標や校訓・校是を踏まえ、自校の強みや特色等を整理・再構築することなどを通して策定するものです。本県では、最初に育成を目指す生徒像を明確にすることで3つの方針が策定しやすくなると考え、生徒育成方針を定めた上で、教育課程編成・実施方針、生徒募集方針を具体化していく手順を示しました。

当初は、現場から戸惑いの声も上がりました。しかし、策定に向けた生徒・保護者や地域との議論は、自校の強みや特色を再認識する機会となり、教育活動をさらに充実させる動きにもつながったようです。また、学校説明会等で中学生に自校の強みや特色を説明しやすくなったという声も耳にしています。

3つの方針については、生徒・保護者や地域の声を聞きながら、不断の見直しをしていきます。それにより、各校の特色が一層明確化し、魅力がさらに高まっていくものと期待しています。

「お話を聞いた先生」 学びの改革支援課 教育幹兼高校教育指導係長 廣田昌彦
／高校教育指導係主任指導主事 腰原智達
／高校教育指導係長（当時） 齊藤則章（現・飯田高校校長）
／高校教育指導係主任指導主事（当時） 小口雄策（現・諏訪清陵高校校長）

長野県では、新たな高校のあり方について校長などと繰り返し議論を重ね、2018年9月に策定した「高校改革」夢に挑戦する学び「実施方針」の中で、学校ごとに「3つの方針」と「ブランドデザイン」を策定する施策を打ち出しました。これは、カリキュラム・マネジメントの視点から各校の教育活動を体系化して地域や社会と共有し、中学生の進路選択に資するとともに、高校が自校の特色・魅力づくりを進め、さらなる教育の質的向上を図るためのものです。策定にあたり、3つの方針は中学生が理解できる平易な表現にすること、ブランドデザインは分かりやすいものにするなどを各校に伝えた上で、教頭を対象とした研修を実施し、19年には教育委員会が各校の試案すべてに対して具体的な助言を行いました。